

17 フランス領インドシナの植民地都市研究序説

—ハノイとサイゴン・チョロン—

キーワード：仏領インドシナ連邦、ハノイ、サイゴン・チョロン、新市街、旧市街

高 田 洋 子*

A Comparative Study on the History of Two Cities in
French Indo-China: Hanoi and Saigon/Cholon

Key Words: French colonialism, Hanoi, Saigon/Cholon, boulevards, a small Paris

TAKADA Yoko

- | | |
|-----------|-----------------|
| 1. はじめに | 3. サイゴン・チョロンの歴史 |
| 2. ハノイの歴史 | 4. 結びにかえて |

1. はじめに

仏領インドシナ連邦は、19世紀後半から20世紀半ばまで、東南アジア大陸部インドシナ半島の東部に存在したフランスの「歴史的領土」である。インドからビルマ地域に侵略したイギリスに対抗して、フランスは南シナ海沿岸からインドシナ半島を攻略した。フランスの支配権力は1860年代末にサイゴンに樹立された後、やがて20世紀初頭には現ベトナム・ラオス・カンボジアを含む広大な領域に統一的政治体制を確立するに至った。第1次インドシナ戦争(1946-54)の軍事的敗北によって撤退を余儀なくされるまでの約80年間、フランスはインドシナを植民地支配下に置いたのである。

本稿は、フランス支配下のハノイ(現ベトナム社会主義共和国の首都)とサイゴン(同国ホーチミン市)に関する、植民地都市研究のための予備的考察にすぎない。当時のハノイおよびサイゴンは、仏領インドシナ連邦の第1級都市(直轄地)として本国領土の延長と見なされた。両市の都市行政はそれぞれの市長及び市議会が行った

* 敬愛大学国際学部・教授

が、上級行政官庁の監督を受けた。元来、植民地都市は、ヨーロッパの政治的・経済的・文化的モデルを表象し、植民地諸活動の発信司令拠点であったと考えられる。筆者は、インドシナ植民地研究の一環として、これらの都市形成の実態を検討したい。

そもそもベトナムのハノイは19世紀初頭までタンロン（昇龍）と呼ばれ、10世紀に始まる独立王朝以降、民族の都であった。しかし1887年以降は仏領インドシナの首都となり、植民地総督府の中枢部が移植された。他方のサイゴン（現ホーチミン市）は、1858年以降のフランスによるインドシナ侵略の起点となった。フランス海軍は占領と同時にサイゴンを海外諸勢力に対して開港し、当初はそこに「東洋のパリ」の建設を構想した。

では、ヨーロッパを代表する近代国家フランスのアジアにおける植民地都市として、これら2つの街はどのような変容過程をたどったのだろうか。ここでは、2都市の歴史的背景を踏まえて植民地期の都市構造を比較検討し、その連続・不連続性を考察する。フランス植民地権力の意図は都市建設にどのように実現されたのか、また誕生した植民地都市空間の特徴や様相をできるだけ具体的に明らかにすることを小論の目的とした。

2. ハノイの歴史

2.1. 独立王朝の都：タンロン（昇龍）からハノイ（河内）へ

1995年に南仏エクサンプロヴァンスで開催された第2回 Euro-Viet 国際会議において、Phan Huy Le 教授（ハノイ国家大学、元ベトナム歴史学会会長）は、19世紀ハノイの土地台帳を分析した発表のなかで、ハノイの歴史を次のように述べている。

「李朝（1010-1225）の Lý Thái Tổ（李太祖）は、1010年に華閩 Hoa Lư から昇龍 Thăng Long（現在の Hanoi）に遷都し、そこに Ung Thien（應天府）を建設した。陳朝（1226-1400）の下で、昇龍は61の Phuong（同業者地区、坊）に分かれていた。それらが完全な行政単位であったかは、不明である。さらに黎朝（1428-1527）の時代に、昇龍は Dong Kinh（東京）もしくは Trung Do（中都）と呼ばれるようになった。1469年からは、Phụng Thiên（奉天）府内部に Quảng Đức（廣徳）と Vĩnh Xương（永昌）の2区をもち、それぞれの区は18坊に分かれた。先の Ung Thien 府の時代も Phung Thien 府の時代も、そこは行政特別区として宮廷の直轄地であった。その後、黎朝期以降18世紀に至るまで、昇龍はひとつの県を成して、内部は2区36坊から構成

され続けた。」¹⁾

このようにハノイは、ベト族による大越国（李 1010-1225、陳 1226-1400、胡 1400-1407、黎 1428-1527、漠 1527-1592、後期黎 1592-1789）の諸王朝の約 800 年にわたる王都であった。それに遡る北属期（中国による支配の時代）にも、隋（602-618）・唐（618-905）の時代を通して支配地の要塞が置かれた Tong Binh（宋平）であり、Dai La（大羅）として知られた中国支配の拠点だったのである²⁾。

胡朝（1400-27）が一時的に都をタインホアに移した時に、昇龍タンロンは、タインホアの西都に対して「東都」と呼ばれた。この「Dong（東）Kinh（京・都=Do）」を、17-8 世紀に訪れた西洋の商人が Tungquin、Tonkin と記述して発音した。後にフランス人は、この地名を北部ベトナム全域を指す「トンキン Tonkin」に継承させて使用するようになった³⁾。図 1 は黎朝時代の東京 Dong Kinh 図に解説を加えたものである。西湖の南に城壁で囲まれた中に行政府の様子が見え、蘇歴江（トーリック川）、周囲の小河川、湖、建造物などが描かれている。

しかし 18 世紀後半における西山党の台頭の後、19 世紀初めに南北ベトナムを統一した阮朝は、都を中部のフエに置いた。その結果、昇龍は北部地方の一府にすぎなくなった。阮朝初代皇帝ザロン帝は、旧 Phụng Thiên 府を Hoài Đức 府に、その中の旧 Quảng Đức 区を Vĩnh Thuận 区に、旧 Vĩnh Xương 区を Thọ Xương 区に名称変更した。続くミンマン帝による 1831 年の行政改革の時に、昇龍は地名を河内 Hà Nội（ハノイ）と変えられ、新たに再編された Hoài Đức 県の管轄下に置かれることになった。そこは現在のハノイ行政区とほぼ等しく、現 Hoan Kiem 区、Hai Ba Trung 区、Ba Đình 区、Dong Da 区の 4 つを含んだ。図 2 は、1885-8 年頃に書かれた同慶地輿誌のなかの河内の Thọ Xương 区およびハノイ城を含む Vĩnh Thuận 区の一部である⁴⁾。ハノイ城の周囲にはたくさんの村や坊が存在し、文廟、科挙の試験場、還剣湖などが記入されていて興味深い。

Le 教授に依れば、19 世紀の Thọ Xương には、110 の thôn（村）と Phường（坊）が含まれ、1947 mẫu 4 sào 03 thước 3 phân 1 ly の面積（約 700 ヘクタール）の土地が登

1) Phan Huy Le, "Les Anciens Cadastres de Hanoi," presented paper for Colloque international Euroviet (Universite de Provence, France), 1995, pp. 1-2.

2) Tran Viet Anh, *Hanoi Atlas, Tourist Maps*, The Gioi Publishers, 1997, pp. 1-9.

3) Philippe Papin, *Histoire de HANOI*, Librairie Arthème Fayard, 2001, p. 119.

4) Thọ Xương 区は図 2 にみるように、城趾の東と南に広がる地区であり、これに対して Vĩnh Thuận 区は西湖の南辺と城趾の西の地区 [Plan du District de Thọ Xương en 1831, Plan du District de Thọ Xương sous le Règne de Dong Khanh]。同慶地輿誌 (The Descriptive Geography of the Emperor Đồng Khánh), p. 1448.

録されていた（1805-1837頃）。そのうち10%は私有の水田、26%は公有の土地と水田、残り64%が商工業地域が含まれる通りや村であった。ハノイは、17世紀以降に発達する紅河デルタの農村小工業の産物が流入する城下町であった。郊外の村からハノイに商品運び込む人々や同業者の者たちが、出身地の名前のついた村やその職名のついた坊に住んだ⁵⁾。

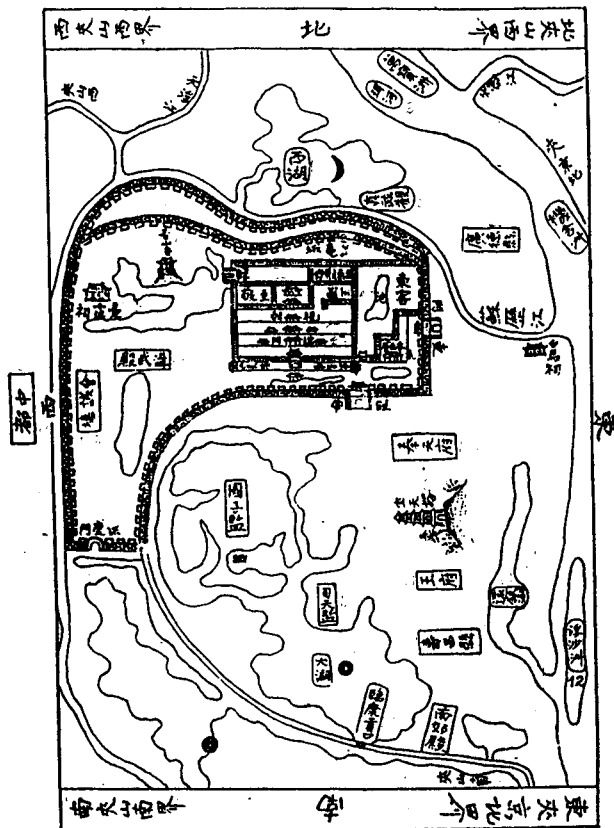


図1 黎朝時代の東京 (Dong Kinh) 図

出所：Phan Huy Le, "Les Anciens Cadastres de Hanoi," presented paper for Colloque international Euroviet (Universite de Provence, France), 1995の史料。

5) 坊 Phuong は伝統的にベトナムの都市部の行政単位。北部では、職業ギルドまたは同郷人集住の地区のまとまりであった。かつて各坊には入り口の門と Ngo (路地) があった。1mâu を 3600m² で換算。

ハノイの街角には、近隣の村で採れた産物を天秤棒につるして売り歩く行商人が多い。旧市街やホアンキエム湖周辺の古くからの通りには、客が行商の農婦と値切り交渉を真剣に続ける様子が見受けられる。1国の首都であるハノイは、つい最近まで農村と街が同居しているかのような印象を与えた。

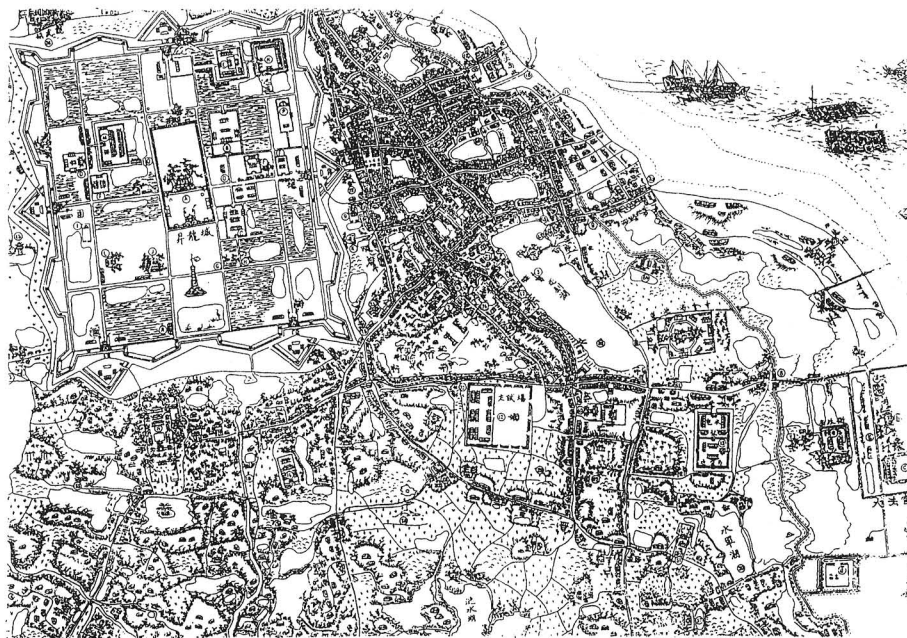


図2 フランス植民地化以前のハノイ図 (1873年)

出所：Service géographique de l'Indochine, édition de décembre 1916.

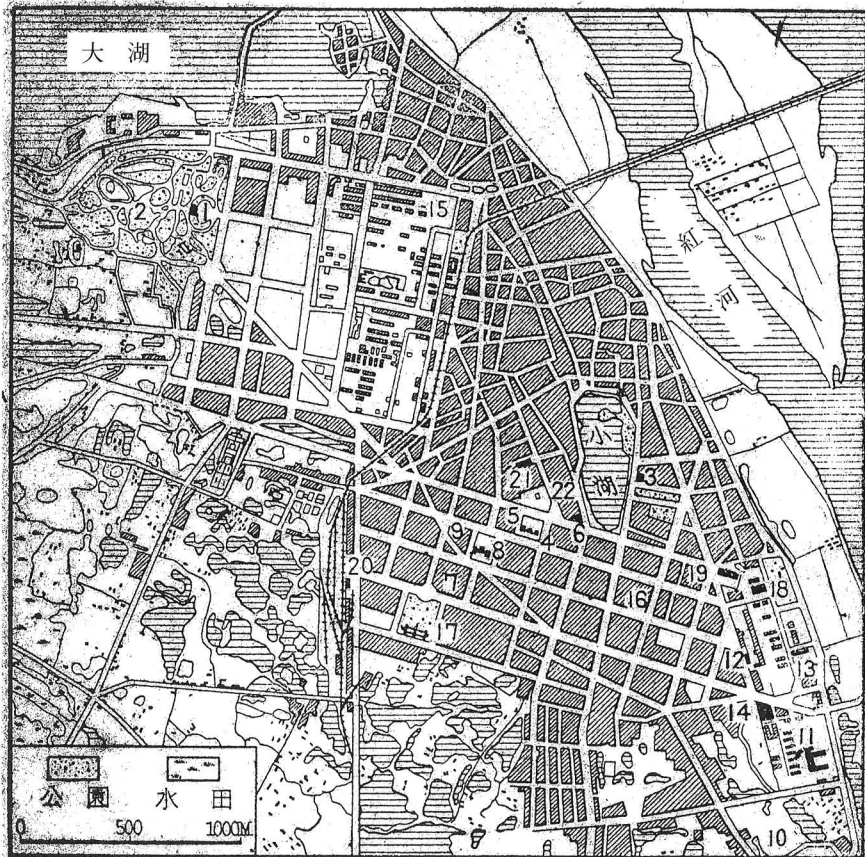
2.2. 仏領インドシナ連邦の首都：ハノイの変貌

フランス軍によるベトナム北部の侵略は、1873年から急速に拡大した。紅河デルタの主要な町は、次々と武力で占領された。1874年に阮朝政府とフランス政府との間に結ばれた条約は、フランスにハノイ、ハイフォンにおける通商権及び紅河航行の自由と、南部6省の公式の割譲を許した⁶⁾。

1875年から1882年まで、フランスは阮朝政府が設置した紅河右岸の外国人居留区に踏みとどまっていたが、海軍大佐リヴィエールの戦死⁷⁾を機に軍事的攻勢に出た。これに対して阮朝が派遣を要請した中国(宗主国)清朝の軍は、1884/5年にフランス軍に破れた。阮朝政府はついに屈服を余儀なくされたのである。1885年以降も勤王

6) フランス軍による紅河デルタの攻撃は、1873年11月から12月の短い間にフンエン、バックニン、ハイズオン、ニンピン、ナムディンで続いた。しかし隆永福が率いる黒旗軍によってフランス軍の海軍中佐ガルニエが同年末に殺害されたため、急遽トウドック帝はDuprée提督に和平協定を申し入れ、1874年3月に第2次サイゴン条約が締結された。これによって阮朝政府はフランスにコーチシナ東部3省の割譲を正式に承認し、西部3省の占領も認めた。北部ベトナムについての自由貿易権もフランスは奪い取った。

7) リヴィエール海軍大佐は1882年にハノイ城占拠を成した直後にベトナム・中国共同軍によって倒された。フランス政府がトンキン再進出に乗り出す契機をつくった重要人物である。



1. 総督府 2. 植物園 3. ハノイ市役所 4. 税務署 5. 憲兵隊 6. 警察本署 7. 保安局
8. 裁判所 9. 監獄 10. パストゥール研究所 11. ラネッサン病院 12. インドシナ大学
13. 軍司令部 14. 軍参謀部 15. 航空本部 16. 極東フランス学院 17. モーリス・ロン美術館
18. 地質博物館 19. オペラ座 20. ハノイ駅 21. ハノイ大聖堂 22. 商業会議所

図3 植民地時代のハノイ

出所：逸見重雄『仏領インドシナ研究』日本評論社、1941年、6頁

運動に身を投じた人々はベトナム中部と山岳地帯でフランス軍との戦闘を続けたが、1887年の「仏領インドシナ連邦」の成立によって、フランスの植民地権力は揺るがぬものとなった。

ハノイを占領したフランスは、阮朝の要塞（ハノイ城）を破壊した。それは、民衆に対して、フランスによるベトナム王朝体制の打破をシンボリックに表示するのに強力な効果があったと考えられる。跡地には、フランス支配権力の頂点に立つ総督府の建物が建設された。一方、旧来のハノイの交易・商業地区は、ほぼ手つかずのままに置かれた。その結果、移植されたヨーロッパの近代的な行政都市ゾーン（新市街）と従

来からの伝統的商業生活ゾーン（旧市街）という2つの要素が、ハノイの基本構造となった。フランスの飛び地のような新市街区と、現地人が住む旧市街区の両方が分立共存した街、それが仏領インドシナ連邦の首都ハノイの姿となったのである。

以下では、1940年代初めのハノイの街図（インドシナ旅行センターと日本の鉄道省観光局の共同印刷『河内市街地図』）を用いて、植民地期のハノイ市を詳しく検討することにした。

〈旧市街〉 旧市街区には、城趾と紅河に挟まれた還剣湖（ホアンキエム湖）北岸の地区が含まれる。フランスの直轄地となる以前から、先述の通りにハノイ城下の商業地区は長い歴史を持っていた。1880年代の古図では、紅河の洪水を吸収するためのたくさんの沼地や池の存在もそこには認められる。それぞれは水路で繋がれ、水路は城塞内への物資の供給路として活用されていた。

しかし、インドシナ植民地連邦が成立した2年後（1889年）に、紅河から旧市街の中心を東西に抜けて城塞の外堀と繋がっていた蘇歴江が、小水路をわずかに残して埋め立てられた⁸⁾。旧市街地区に含まれた沼地、池、水路は20世紀初頭までにほとんど埋められて造成地となった。

一般的に述べると、近代都市の建設に当たって、曲がりくねった古い道はまっすぐな直線道路に修正され、公有地と私的利用地の間に介在していた曖昧な空間は排除される傾向を示す。「国有地」に収容された土地には公共の建造物（役所、学校、病院、公園等）が建ち、碁盤の目のような町並みが計画され、造成された空間には、フランスによって近代的都市機能が注入されるはずであった。

ところが、ハノイの旧市街の場合、この点はうまくいかなかった。古い沼の埋め立て地で公共用地となるのは、旧市街北端の公営ハノイ中央市場（ドンスアン市場）位である。その他は4つの映画館および北端の中央市場駅が建設されただけで、フランス植民地政府はベトナム人の過密な居住・経済活動の空間を、近代都市に再編することは諦めた。

植民地の時代を旧市街で生きた庶民層は、しかし随所でフランス風建築を部分的に取り込みながら、ハノイの風土と溶け合った独特の構造を持つ町家を充実させた。自然の光や風を上手く取り込み、奥行きのある彼らの生活空間を保持することに成功した。道路に面した2階建ての間口の壁面には、フランス植民地期を通していくつかの

8) 土田愛「36通り地区の成り立ち」『スペースデザイン』1996, p. 46。

特徴ある建築様式の変遷が刻まれた⁹⁾。

旧市街の中央通りは古くから Hang Chieu, Hang Ma 通りである。紅河側の端に門がある。フランス植民地期にはトンキン攻略の先駆けを作った貿易商人デュピュイ¹⁰⁾の門と名づけられ、近くに記念の像がつけられた。

Hang Buom 通り (旧 Rue des Voites) には、華僑の広東会館、福建会館、そして白馬大王寺があった。古いこの通りは埋め立てられた蘇歴江のすぐ南になる。近くの Hang Ngang 通りは広東通り Rue Cantonais と呼ばれていた。当時のハノイの中華街である。ハノイの華僑人口は 1921 年に 2,380 人 (ハノイ市総人口 75,000 人の 3.2% にすぎない)、1928 年 4,428 人 (同 3.5%) と後述のチョロンと比べれば、いかにも小さい¹¹⁾。

ホアンキエム湖にむかって南の Hang Dao 通り (白布を桃色に染める染色通り) には 1907 年 3 月に民族主義運動で有名な東京義塾¹²⁾ が開校した。Hang Bac 通りは手工芸 (細工) 店が多く立ち並ぶ通り、Hang Tiec は金物通り、Hang Duong は砂糖通りだ。ハンザ市場の裏手には、当時は小さなプロテスタント布教会が建っていた。

この 190 ha にもみえない旧市街に Chua (大乘仏教寺院) は 7 カ所、コミュニティーの集会所 Dinh (亭) が 36 カ所、英雄神を祀る Den (殿) が 15 カ所も存在した。消滅したものは 12 の Dinh および Den の 2 カ所である。Dinh は Ham Buom 通りの南に多く分布するのに対して、Chua は旧市街の西側に集中している (1994 年 11 月現在)¹³⁾。

〈新市街〉 新市街は 3 ブロックに分けて、当時の主要な建造物をみていくことにした

9) 町家の構造および建築様式の変遷に関する詳しい研究は、『スペースデザイン：ベトナム建築大博覧』(1996) に所収の重枝豊・中沢信一郎・村松伸「ベトナム建築史とその特質」、村松伸「ハノイ・ハノイ・ハノイ」、「ハノイ近代建築 100 選 (大田省一解説) + 古建築 10 選 (早稲田大学アジア建築研究室)」、大田省一「重層するハノイの歴史」、土田愛「36 通り地区の成り立ち」、辻鈴子「ホーコーの暮らし」、大嶋信道「ハノイ 36 地区の町屋の建築類型」など。ここでは、町家の時代的変遷を「伝統的町屋」、「古典主義町屋」、「ベトナム・アールデコ町屋」等と表現している。Philippe Papin, *ibid.*, pp. 234-5.

10) Jean Dupuy は E. Millot と共に 1872 年に紅河を遡航して雲南との交易を目指したが、阮朝政府のハノイの役人に阻止された。コーチシナの Dupré 提督は、この事件を受けて 1873 年 11 月に、Francis Garnier 海軍中佐を 180 人の兵士とともにハノイへ派遣した。ハノイ城塞はすぐに占領されて、名高官であった Nguyen Tri Phuong が殺害された [Việt Nam Cuộc Chiến, 1858-1975, Hanoi, 2001, pp. 112-121]。それは、フランスによる最初のハノイ攻略事件であった。

11) Tran Huy Lieu 他, *Lich Su Thu Do Ha-Noi*, Nha Xuat Ban Su Hoc, 1960, Hanoi, p. 113.

12) 東京 (トンキン) 義塾とは、20 世紀初頭のベトナムの開明的知識人によって推進された実学教育中心の私塾。日本の福沢諭吉の慶応義塾の影響を受けてハノイでファン・チュウ・チンらが開学した。

13) 土田前掲論文、p. 48.

い。プチラック（小湖）と呼ばれたホアンキエム湖を目印にして、湖の東西両サイド地区(A)と南の地区(B)、城跡地とその周辺(C)である。

(A) ホアンキエム湖の東西：湖の南から東側の湖岸に添った通りには、湖に面して銀行や商業・農業会議所（1941）、中央郵便局（1896）、ポール・ベール¹⁴公園を挟んで、ハノイ市庁舎が並ぶ。通りの名は、ハノイ攻略の重要人物の一人となったガルニエ将軍の名が付けられた。この一角の東側には、ベトナム北部を管轄するトンキン行政府とトンキン理事官官邸がみえる。後者は、新古典様式とされる優美な装飾性を特徴とする建造物である（現迎賓館）。通りの反対側には公園が配され、その北にモダニズム様式のインドシナ銀行（1930）が、また南に下ればメトロポール・ホテル（1901）が並ぶ。この地区の中心は、1880年代に先述のハノイ城再占拠を成し遂げたアンリ・リヴィエール将軍の名のブルバール（大通り）だ。この地区の最北東部のはずれに、紅河の治水や鉄道・道路網の建設に関わる公共土木局の重厚な建物もみえる。

湖の西側の地区には、1883年に完成する大聖堂とその付属宗教施設が中心的位置を占める。カテドラルの内部および祭壇には、木彫り漆塗りのベトナム的装飾が施された。この一角の西側にはトンキン保護領公立病院があった。また湖に臨んで、マンサード様式とされる優美な商館のような新聞社（Avenir Tonkinois）、商業会議所の建物が建っていた。

(B) ホアンキエム湖の南

小湖の南のポール・ベール通りは、パリのオペラ通りに模して造られた。一流ホテルや映画館が並び、華やかなパリの雰囲気移植しようとしたものだ。通りの奥には、新古典様式の重厚で装飾的なオペラ座（1911）が造られた。それは6査路の正面に、まさに象徴的に配置された。

ポールベール通りから南の地区は、碁盤の目のように、大きな通り Boulevard が3本、それらとクロスする南北8本以上の通り Rue が走っていた。それぞれに街路樹が施されて、近代的都会性が強調された。この一角には公文書館や付属図書館、財務監督局、裁判所、監獄などの施設が、またハノイ駅の大通り前にはホテルと雲南鉄道会社、

14) ポール・ベールはトンキン・アンナン理事長官としてハノイに1886年赴任。現地社会の慣習を尊重し、また現地人代表による総督の諮問会議を設置した。いわゆる協同政策をインドシナで最初に導入しようとした人物。

特別警察署があった。ローランド通りの南のカロー通りには、教育庁、インドシナ大学（1926）、フランス極東学院のほか、美術学校やいくつかの中高等学校などが集められた。

19世紀末にフランス人居留区があった紅河沿いの場所には、植民地軍関連の施設、参謀本部、各種の病理関連研究所、ラネッサン病院が集中していた。その南に向かうと、市街の端の静寂の場に聖アントワース教会が、さらに最南端に醸造工場が建っていた。

ホアンキエム湖の東岸から南に伸びた先述のフランシス・ガルニエ通りは、中央郵便局の前からはドンカイン（同慶）通り、その先はフエ（順化）道路と呼ばれた。後の国道1号線である。ハノイ駅前から南に伸びる道は、マンダリン（官人）道路である。このほかハノイの都市計画には、ハノイ駅の近くの Thien Quong 池と Bay Mau 池の中間地帯に整然として密なる道路網の建設が想定されていたようであるが、それらは完成されないうまま、ベトナム民主共和国の誕生を迎えた。

(C) 城趾・グランラック（大湖）[Ho Tay（西湖）] 周辺

この地区の核心部は、仏領インドシナ連邦の最高権力の中枢としての総督府である。ドゥメール総督の時代（1889-1902）に、サイゴンにあった総督官邸はここに移された。総督の絶大なる権威を象徴するかのよう、重厚な建造物が広大な植物園を後に配して建設された。ドゥメールは紅河に架かる大鉄橋（エッフェル会社によるデザイン）の名にも冠された。彼はインドシナを本国から独立採算の植民地とすべく、20世紀初頭に連邦の中央集権体制化をはかり、思い切った財政改革を行った。

総督府の周囲には、南側にフランス人官吏の個人住宅ヴィラ、二つのカトリック教会、アルベール・サロー高等中学校、女子中学校、サン・ポール療養所、大学関係者の宿舎などが立地する。そして、城趾にフランス軍兵営、フランス軍クラブ、テニスクラブなどがあった。

城趾の周辺にはベトナムの古寺（11世紀建立の一柱寺など）が残された。11世紀に始まる科挙の試験の合格者を祀った文廟は、城趾の南にそのまま位置した。しかし、阮朝政府が行っていた科挙試験は、ベトナムでは1919年までに廃止された。文廟の南は沼沢地の多く残る地区となり、その先には水田地帯が広がった。

3. サイゴン・チョロンの歴史

3.1. 南進の拠点：プレイノコールからサイゴンへ

〈ベトナム人の南下〉

ベトナム人が現在のベトナム南部に勢力を伸ばす 17 世紀、サイゴンにはクメール（カンボジア）人が住んでいた。中国語の文献に依れば、クメール人がこの地に入植したのは、アンコール帝国の最盛期 12 世紀の末（1197 年）だという。人々は一人の王を擁立し、都の名をプレイノコール Prei Nokor（カボックの、王の森）と呼んだ¹⁵。しかし、ベトナム人に主権を奪われるまで約 500 年に及んだクメール人の足跡は、ほとんど残されていない。1815 年に描かれたザディン Gia Dinh 省の絵地図（図 4）のなかに、アヴァラルシュ川にかかる橋に「高綿橋（Cau Cao Men [カンボジア橋]）」という名をみるだけである。

海から舟に乗って移住してくるベトナム人の商人は、年を経る毎に増大した。1623

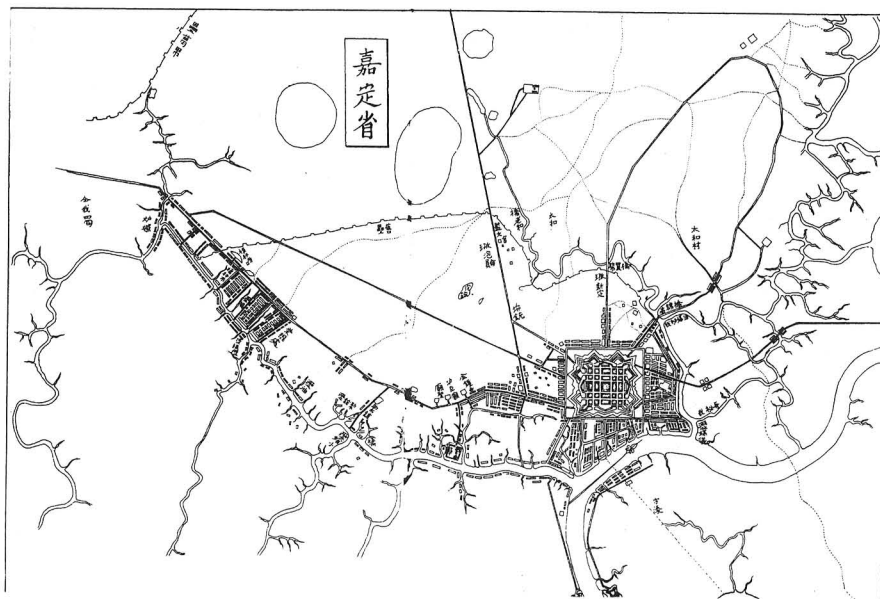


図 4 嘉定 (Gia Dinh) 省とその周辺 (1815)

出所：Saigon-Giadinh xua, tu lieu & hình anh, Nha xuất bản Thanh Pho Ho Chi Minh, 2000, pp. 30-31 [原史料は Bulletin Société des Etudes Indo-Chinoises, 1935, No.4 p. x.]

15) La Société des Etudes Indo-chinoises, *Géographie Physique, Economique et Historique de la Cochinchine, Monographie de la Province de Gia-Dinh*, Saigon, 1902, p. 104

年、ウドン（カンボジア、プノンペン以南）のクメール王は、ベトナム中部の豪族阮氏に対して、プレイノールの交易税の取得権を委譲し、ベト族移民の受け入れを承諾した。商人、農民、漁民などからなる移民の数は年をますます増大した。クメール王の弱体化を背景にしたその取り決めによって、後のメコンデルタへのベトナム人の進出が方向づけられた。

フエに拠点を置く阮氏の勢力は、1653年にニャチャン Nha Trang に到達した。そして1658年にクメールの王が阮氏への服属に同意するや、一挙に南部に拡大した。1680年には、中国明朝の遺臣が、国内の争乱を逃れてメコンデルタへの入植を阮氏に希望した。阮氏はドンナイとミトーの両地方への移住を許し、自らも1689年に軍隊および入植団を投入したといわれる。1693年にはファンティエット Phan Thiet を占領。1698年に南部統治の拠点となる行政府をタンビン Tan Binh（新平）県の県都（サイゴン地方）に置いたのである¹⁶⁾。

18世紀には、フエ周辺の人々がサイゴン（タンビン）川及びドンナイ川の流域に入植した。植民者には土地が分配され、共同体が形成された。ベト族の村の守護神を祀る亭や寺がつくられ、村創設の記録が残された¹⁷⁾。

西山党 Tay Son の農民反乱が全国を揺るがしていた時代に、サイゴンの町も1777年に西山軍の支配下に置かれた。グエン・フック・アイン（後の19世紀阮王朝の初代皇帝嘉隆）は、フランス軍と中国人の力を借りて町を奪還した¹⁸⁾。フランス軍大佐 V. Olivier が彼の要請に応じてつくったとされる幾何学的な八角形の要塞（嘉定城）と、周囲の整然と区画された路を図4にみることができる。

〈華僑の町チヨロンの誕生〉

18世紀は、ベトナム人のメコンデルタ進出の時代であるとともに、ベトナム周辺の中国人の動きが活発化する時代でもあった。彼らは、サイゴン川の中州に位置するフォー島（Cu Lao Pho）にジャンク船で到来しては、交易活動に従事した。現在の

16) *Ibid.*, pp. 104-5.

17) *Ibid.*, p. 105. それらの例として、ハントン Hanh thong 村の1698年創設、アンロック An loc 村旧アンクオン An khuong 村の1716年、アンフォック An phuoc 村は1746年、フートー Phu tho 村は1747年、タンソンニユット Tan son nhut 村は1749年、アンロイドン An loi dong 村は1751年というように記録が残された。

18) タンロンとフエに権力の分裂した南北対立の時代（16世紀）を経て、18世紀までのベトナム社会は、統一に向けた長い動乱期を迎えた。西山党の農民蜂起に端を発した統一運動を収束させたのは、フランスの支援を受けたグエン・フック・アイン（1802年阮王朝初代皇帝）である。

チョロン市街の中心から北西約2km程の所にある覚林寺 (Chua Giac lam) は、華僑の献金によって1744年に建立された¹⁹⁾。

西山 Tay Son 軍にサイゴンが支配された時、華僑の人々は戦禍を避けて、1778年にタンビン川支流のほとりに落ち着いた。しかし、追撃した西山軍によって約1万人が虐殺された。グエン・フック・アインが軍事的安定を達成した1784年以後に、人々はあらためて町を建設した。華僑の町 (後のチョロン) の誕生である。1788年に建立された覚園寺 Chua Giac Vien には、後の嘉隆帝も参拝したと言われている。

19世紀前半に、チョロンは余剰米を産する新開地メコンデルタへの入り口に位置し、華僑の交易活動の拠点として発展した。サイゴンのベトナム地方役人とチョロンの華僑の米の密輸をめぐる結託は、備蓄米を確保して国内の統制強化を図ろうとする阮朝政府にとって、次第に脅威となった²⁰⁾。

3.2. 挫折した「東洋のパリ」構想

19世紀半ばに至ると、欧米列強による東・東南アジア地域への干渉が増大した。ベトナムも例外ではなかった。仏・英・アメリカは、グエン朝に対して次々と開国を迫った。フランスはベトナム北部でのカトリック宣教師殺害事件を口実に、1858年にダナンを攻撃した。それが不首尾に終わると、モンスーンに乗って翌年にサイゴンに到着した。阮朝の軍隊はあっと言う間にフランス軍に敗退し、嘉定城が陥落した。その後フランスはサイゴン開港を宣言し (1860)、メコンデルタ地方への軍事的攻勢に出た。1867年には占領を完了し、直轄植民地「仏領コーチシナ」を樹立した。

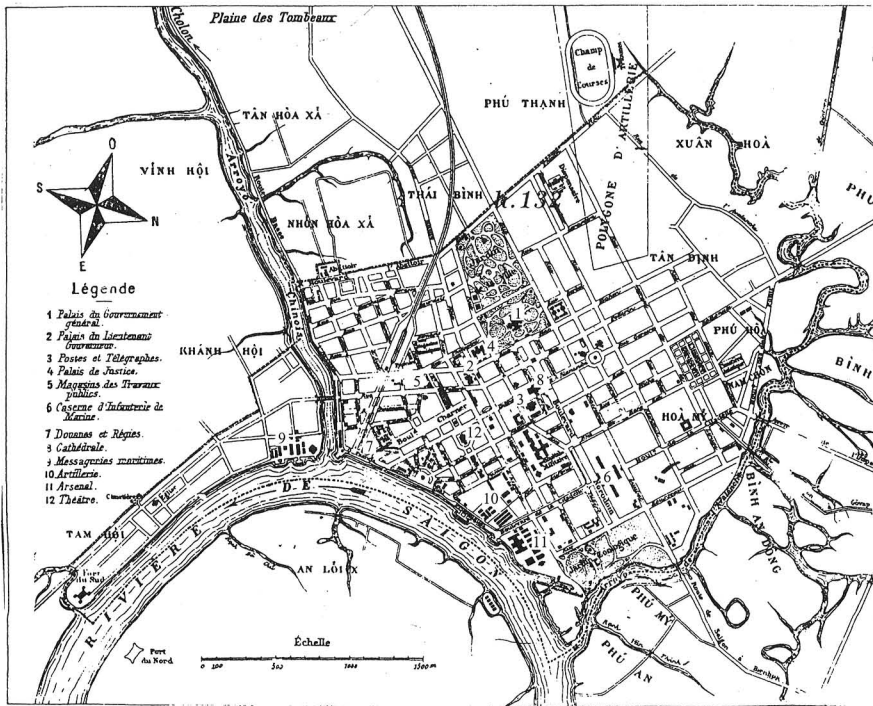
サイゴンは、仏領コーチシナの中心地として、また当初はフランス人の国際都市として都市建設が進められた。一方、チョロンは、植民地貿易の主力商品となる輸出米の集散地として、フランス植民地期に一大発展を遂げる。1931年に両市は合併されて、人口40万規模の大都会になったのである。

〈仏領コーチシナの都：サイゴン〉

サイゴンの街の骨格は、1861年に招聘された軍の技師コフィンが計画したとされる。嘉定城の城壁を壊し、ベトナム人の居住区を一掃した土地に、当初は面積2500ha、人口規模50万の壮大な都市が構想された。街の中心部には大通り Boulevard が設計され、要所要所にランドマークとなる建物が建設された。川岸には商業港の施

19) 寺は、混血の明郷 Minh Huong が投じた寄付によって維持・改修され、現存する。

20) 藤原利一郎『東南アジア史の研究』法蔵館、1986年、p. 283-5。



1. 総督府官邸
2. コーチシナ知事官邸
3. 郵便局
4. 裁判所
5. 公共土木倉庫
6. 海軍兵舎
7. 税務署
8. 大聖堂
9. 海運会社
10. 砲兵所
11. 海軍工廠
12. 劇場

図5 20世紀初頭のサイゴン市

出所：Ibid., p.78.

設やロータリーが整備された。サイゴン港は、植民地期を通して、インドシナ植民地貿易の7割を占める外国貿易の中心地となった²¹⁾。1905年、1931年、1954年のサイゴン市街図を基に、街の建造物をみていくことにする。

(A) ノロドム通り、カティナ通り周辺

サイゴンの街の最も基軸となるノロドム大通り（約1600m）の起点は、樹木帯に囲まれた仏領コーチシナの総督府である。その官邸は、1873年に建設された壮麗な建物であった。仏領インドシナ連邦の首都がその後ハノイに移ったために、その建物はインドシナ総督府に代わった。その左には控訴院（1884年建設）、奥に中央刑務所が置かれた。新たに造られたコーチシナの地方行政府は、控訴院の筋向かいにあるが、

21) Sai Gon -Gia Dinh Xua, tu lieu & hình anh, TP. HCM, 2000, p. 98

これも 19 世紀の重厚な古典様式の建築物である (1890 年)。

インドシナ総督府正面のノロドム大通りは、アヴァラルシュ川まで 1.4km をまっすぐに伸びている。左手の嘉定城跡地にはフランス海軍の兵舎がつけられた。計画的に緑地帯を配置するヨーロッパの近代都市のように、総督府の背後にモーリス・ロン公園、そしてブルバールの先端の川縁には植物園が設けられた。大きな植物園の一角には、サイゴンには珍しいインドシナ様式²²⁾のブランシャール・ドゥ・ラ・ブロス美術館 (1929) が建っていた。ノロドム大通りは、ノートルダム大聖堂 (カテドラル) の一角を含んだ。ロマネスク様式の巨大なカテドラルは、1877 年に建設が始まって 1880 年に完成した。正面広場に臨む位置に中央郵便局がつけられた (1891 年)。大聖堂の正面広場からサイゴン川に向かって、緩い傾斜でカティナ通り (約 1000m) が下っていく。並木で覆われたその通りには、美しい彫刻を戴いた市民劇場 (1895 年)、パティオ (中庭) のあるコンチネンタルホテル (1880)、カラベリホテル、グランドホテル、サイゴン川のほとりにマジェスティックホテル、カフェ、映画館などが立ち並び、仏領インドシナで最もフランスの香り漂う地区と言われた。

カティナ通りに平行して、その西側にかつてはサイゴン川から運河を引き込んだブルバール (約 800m) が整備され、その突き当たりにサイゴン市庁舎が建設された (1908 年)。19 世紀の前パリ市庁舎と酷似したデザインである。市庁舎の一角には、総督事務局、貯蓄銀行が並び、また通りを隔てて国庫出納所、財務代表部、商業会議所そして近衛騎兵隊兵舎などが陣取っていた。この一角は先のコーチシナ行政府の裏手にあって、いわばコーチシナ植民地の官庁街であった。

(B) 市民生活ゾーン

ノロドム通り北側には、瀟洒なヨーロッパ人用個人住宅のヴィラが、樹木に縁取られた各々の敷地のなかに収まって、一つの町並みを形成した。また、サイゴン唯一の高等中学校リセ (11 歳から 7 年) として有名なシャスルロバは、総督府のすぐ右手 (シャスルロバ通り) に、フランス人の中高等女学校と幼稚園はそれより北側に、ベトナム人子弟の学校はその南西側にあった。エンジニアやビジネスマンなどを養成する

22) ベトナム建築とフランス建築の融合をめざしたインドシナ建築様式は、植民地社会の絶頂期であった 1920 年代に、傑出した建築家エブラールによって試みられた。ハノイにおいてはその影響がかなり広範にみられたが、サイゴンには少なく、このほかサイゴン中学校があるのみである (大田省一「動き出したベトナム最大の都市ホーチミンシティ」『スペースデザイン：ベトナム建築大博覧』1996, pp. 115-9)。エブラールの仕事については、Christian Pédelohore, "Hanoi, Mirror of Indochinese Architecture" *Vietnamese Studies*, No. 107, 1993, pp. 26-56 参照。

専門学校はダウンタウンに近い街の東側地区にそれぞれ分散して存在した。

リュロ通りに面して神学校と修道院があり、その一本南の通りにグラル病院の敷地が伸びていた。サンポール病院は大聖堂から西に 1500m、市民病院はサイゴン駅近くにあった。

サイゴン駅前にはサイゴン中央市場（1914 年）のある大広場で、そこから市民劇場に向かってボナル大通り（700m）が伸びていた。劇場の前にはガルニエの像が建っていた。中央市場の西には、高利貸しとしてメコンデルタ開発の資金供給に関わったインド人グループのヒンズー寺院があった（19 世紀末）。同じインド人でもムスリムグループのモスクは、デュプレ通りに 1935 年に建立された。

一方、整然と区画された町並みの一番外れ Mayer 通り（現 Vo Thi Sao）にはヨーロッパ人墓地の端が接していた。それより先は、タンディン地区とアヴァラルシュ川右岸のダカオ地区である。そこは現地人の居住区であったと思われる。それぞれの地区には、公営市場や教会（タンディン教会、Cho Dui 教会、Cau Kho 教会）、診療所、映画館、カジノ、アジア人墓地が含まれた。大通りには、現地社会の慣習を尊重した政策を実行したとされるポール・ベール理事長官（ハノイ在任期間 1886. 1-1886. 11）の名が付けられた。

(C) 軍事・輸出 / 商工業ゾーン

軍事施設は川沿いに海軍工廠、砲兵舎などが配され、シナ水路との合流位置に関税所、荷物受降所、水先案内が、またシナ水路に入った位置のベルギー通りにはインドシナ銀行、香港上海銀行、仏中銀行などの輸出金融部門がまとまっていた。

工業関連の施設は、水道会社が教会から北西 300m の場所にあったほか、中央市場の近くに公共土木局、市民劇場の裏通りに中央電気会社と大きなアヘン製造所が立地していた。この他、先述のタンディン区の端にパストゥール研究所、ダカオ地区の南側ルソー通りにはインドシナ農学研究所があった。

サイゴンの街全体は、大聖堂を中心にして、南北、東西に約 2 × 2.5km の直線道路が基軸となり、約 500ha の面積の内側に、植民地支配のための建物、白人社会の生活空間が収まっていたようである。サイゴン市街の中心部は、机上の計画通りに整然とデザインされていたといえるだろう。

ブルバールの起点にはこれまで述べてきたような新古典様式に飾られた巨大な建造物の他に、いくつかの銅像も置かれていた。それらの人物は、18 世紀末にベトナム

ム・グエン家の後見人となってフランスのベトナム王朝への接近を仲介した Pigneau de Behaine 司教、嘉定城を陥落させたリゴール・ドゥ・ジュヌイ Rigault de Genouilly 海軍大将、コーチシナ割譲をグエン朝に認めさせた事件の功労者フランシス・ガルニエ Francis Garnier などである。

〈チョロンの発展〉

1911年のインドシナ年鑑によれば、当時のチョロンはベトナム最大の物流センターだった。人口は、1889年の37,441(表1)から1911年は138,000に、さらに1922年には224,708に急増した。チョロンの人口はサイゴンより大きく、活気溢れる商工業・交易の街であった。9つの蒸気動力による大精米工場(その内の6工場は完全な華僑資本)が、シナ水路に添って並び、周辺には粳米の袋を満載したサンパン(小舟)がぞくぞくと集まった。水路に浮かぶ舟から労働者たちが積み荷を次々と運び、陸揚げされた袋は高く積み上げられた。精米した輸出来は、ふたたびここからサイゴンに移送された。

街には、コーチシナ全地域に向けられる瓦、タイル、煉瓦の工場、鍋や壺などの陶器工場、ガラス工場、革製品の加工工場、製材所、石切工場、舟具工場などがひしめいていた。また輸出入商品の全てがこの街で手に入った。大きな市場は1日も休みの

表1 サイゴンとチョロンの民族別人口(1889)

	サイゴン	チョロン
フランス人	1,492 (7.9%)	74 (0.2%)
その他欧州人	99* (0.5%)	4
小計	1,591 (8.4%)	78 (0.2%)
ベトナム人	8,994 (47.7%)	22,322 (59.6%)
カンボジア人	92 (0.5%)	—
中国人	7,195 (38.2%)	14,944 (39.9%)
マラバール人	674** (3.6%)	72 (0.2%)
マレー人	251 (1.3%)	24
タガール人	30	
その他アジア人	10***	
合計	18,837	37,441

統計数値は *Aunuaire Général de l'Indochine*, 1889, p. 530 より。

* イギリス人33、ドイツ人11、オーストリア人15、スペイン人2、ポルトガル人2、イタリア人10、ギリシャ人2、ロシア人8、ベルギー人2、アメリカ人1など。

** フランス領インドその他のフランス臣民 *sujet*、その他のインド人を含む。

***日本人、シャム人など [AGI, 1889, p. 61]。

日がなく、商店や劇場は夜もランタンの灯が輝いていた。1906 年末には、極東電気会社による電化が始まった。

約 6 キロメートル離れたサイゴンとの連絡は、サイゴンーミト間を鉄道が一日に 3 往復走り、2 本の市街電車（街の北側とシナ水路沿いを走る）の他、5 ルートの道路に車や自転車、シクロが行きかった²³⁾。

街の住人の民族別構成（表 1 参照）は、ベトナム人と中国人が多くを占め、両者の混血であるミンフォン、クメール人、インド人などは少数であった。ビジネスのためにチョロンに住むフランス人その他の欧州人、欧州人の混血も 1000 人にはみえない。フランス植民地期の中国人移民の流入数は、1920 年代にさらに急増した²⁴⁾。それ以降は、中国人人口がベトナム人口を越えた。チョロンの住人の 2 人に 1 人は中国人となったのであった（他方、サイゴンの華人は 27.9% であり、おおよそ 3 人ないし 4 人に 1 人ということになる²⁵⁾）。

大規模運河の開削を機に、20 世紀に入るやメコンデルタ西部の新田開拓は未曾有の

23) AGI, 1911, p. 628-632.

24) インドシナの華人人口は経済開発のブーム期に入る 1920 年代後半に、とりわけ急増した。たとえば 1926/27/28 年のコーチシナにおける入国者数は各年で 34,800 人、41,547 人、そして 50,807 に急増した（高田洋子「フランス植民地期ベトナムにおける華僑政策—コーチシナを中心に—」『国際教養学論集』千葉敬愛短期大学国際教養科、創刊号、1991, p. 64）。しかし世界恐慌の影響が及ぶ 1930 年から 1933 年頃までに、華僑の出国者数は入国者数を上回った。つまり華僑人口はこの間は減少に転じた。1934 年から 1939 年までは再び急増し、1940 年の日本軍の仏印進駐後第 2 次大戦終了まで再び減少傾向が続いた。

25) Victor Purcell, *The Chinese in Southeast Asia*, London, 1980, pp. 176-177 の表から。19 世紀末の史料も、コーチシナに居住登録をした中国人 58,800 人のうち、46% がチョロンとサイゴンに分布していた事を示す（AGI, 1894, p. 347）。フランス植民地支配の最盛期の中国人人口は、下表の通りだ。

表 2 仏領期ベトナムの中国人人口（1921, 1931 年）

	1921	1931
コーチシナ	156,000 (80%)	205,000 (77%)
トンキン	32,000 (16%)	52,000 (19%)
アンナン	7,000 (4%)	10,000 (4%)
計	195,000 (100%)	267,000 (100%)

*Annuaire Statistique de L'Indochine, Vol. II, p. 63, Vol. III, P. 53.

1931 年の都市人口に占める華僑の比率は、チョロン 48.9% (66000 人)、サイゴン 27.9% (34000 人)、ハイフォン 15.3% (19000 人)、ハノイ 3.9% (5000 人) [Victor Purcell, *op. cit.*, pp. 176-177]。

26) フランス植民地時代には、インドシナの華人は幫制度の下で統治された。入国した中国人移民は方言の異なる出身地毎に福建、広東、潮洲、客家、海南の 5 つの「幫 Congregation」に所属させられ、植民地政府の任命した各幫長の下で管理された（出入国手続き、徴税など）高田前掲論文参照。

展開を遂げた。1920年代に、仏領コーチシナは米の流通・精米諸産業が発展して、多くの移民を惹きつけた。その結果チョロンはますます繁栄した。移民の街チョロンは人々の出入りの激しい流動社会となった²⁶⁾。そこには絶えず新しいエネルギーが注がれ、衝突や混沌も生じた。仏領期のチョロンや華人社会に関する残された公文書は、極めて限られる。チョロンには、植民地政府の権力が及ばない場所や社会空間が多く存在したと思われるのである。

1930年代のチョロン市街図から、町の面積は東西1.7km 南北1.4km、約250haほどであったことがわかる。サイゴンと比較すれば、チョロンは約半分ほどの面積の内に、2倍の人口を擁す人口稠密地だった。道幅が狭く、街路樹や公園はほとんど含まなかった。

サイゴンからメコンデルタ方面に向かってチョロンの街を通り抜ける大通りは、内陸側に3本走っていた。一番中心となるトムソン大通りの中央に、当局が身分登録などを管理する監察局や海軍施設、電報局、治安警察などの役所、コーチシナ病院、聖ジャンヌダルク教会などが並んでいる。中央大通りの北側は整然と碁盤の目の道路網が敷かれ、市立学校、ヨーロッパ人墓地などが存在した。大通りの北のこのような内陸部は、植民地期のチョロンの新しい市街と思われる。

従来のチョロンの象徴的な場所は、ビンタイ市場及び中央市場周辺である。シナ水路に添って、町のやや奥まった南西部にある。野菜や肉などの生鮮品、またアジア人向け・ヨーロッパ人向けの商品が売られていた。サイゴンの市場に輸送される物資もここから送られた。周囲には2つの劇場（中国人用・ベトナム人用）、カジノ、エデン映画館などを含む歓楽街があり、少し北に上がるとチョロン教会、ゴジンジエムとその弟ニューが殺害された場所として有名な聖フランソワ・ザビエル教会（中国生まれの副司教 [1855-1934] によって19世紀末から20世紀初めに建てられた）も建っていた。

華僑および中国系混血のコミュニティは、このあたりからトムソン大通りの南側に、出身地毎の廟を中心に存在していたようだ。最も古い時期に建てられたのは、福建人の Quan Am 廟（1816）や広東人の Thien Hau 廟（19世紀初め）であり、Nghia An Hoi 廟（潮州）、Phuoc An Hoi Quan 廟（1902 福建）、Tam Son Hoi Quan 廟（福建）、Ong Bon 廟（福建）など、いまでも現存している。1階は店舗で2階が住居という独特のショップハウス長屋の密集した町が、華僑街である。そこから離れたサイゴン方向の北東部にはベトナム人の仏教寺院が、また北西部のはずれに道教寺院（1939-49）が造られた。

典型的な中心部の華僑街から東側のはずれは、これも華僑の毎の病院施設（福建病院、広東病院、チョーカン病院、やや離れて潮洲病院）があり、さらにサイゴンに近づくと 1905 年創建のチョーカン教会、海軍施設などが占めた。

チョロンにはベトナム人子弟向けのリセ（Petrus Ky 高等中学校）と仏中国人子弟の通うリセ（Franco-Chinois 高等中学校）があった。富裕層となった華僑のなかには、19 世紀末からカトリック教に改宗し、フランス国籍を取得する人々もあらわれたのである。

1923 年に、新しい都市計画が持ち上がった。関わった建築家エルンストは、サイゴンとチョロンの一体化を考えていた。そのために緑地帯・道路幅の拡張、シナ水路の南側に工業地区を建設することなどが構想された。しかし、襲来した 20 年代末の世界恐慌によって、これらの計画は実現されなかった。

しかしサイゴンとチョロンという異なる起源と機能を持った植民地都市は、1931 年の合併によって、近代都市のあらたな問題を抱えることになった。2 つの市街の間にある低地帯には、40 万規模に拡大した都市生活を支える下層労働者の集住地域が、次第に拡大しつつあった。植民地時代の末期には、シナ水路の兩岸に藁葺きのスラムがびっしりとみられたのである。それは、戦後に独立したアジアの途上国の多くが 1970 年代には共通に抱えるようになる都市スラム化の先駆け状況であった。

4. 結びにかえて

これまでハノイおよびサイゴン・チョロンの諸都市がどのような歴史背景をもち、仏領期にどんな都市に変貌を遂げたかを検討してきた。専ら当時の地図と断片的な史料をたよりに、できる限り丁寧に街の様子や建造物を描く努力をした。不明な部分も多くあって、十分な議論のための実態を把握したとは言い難い面も残っている。しかしながら最後に、それぞれの植民地都市について、連続・不連続性、また固有性と共通性を軸に、筆者の暫定的な結論を提示したい。

ハノイは、10 世紀以降約 800 年に及ぶベトナム人の成熟した政治的中心地であった。仏領インドシナ連邦 2300 万 (1939) の人口の 7 割以上はベトナム民族が占め、その民族揺籃の地である紅河デルタの要衝に、ハノイは位置していた。フランス植民地政府は、そのような地政学的伝統を踏まえて、ハノイを仏領インドシナ連邦の首都と定めた。

植民地権力は、阮朝の王城を破壊してインドシナ総督府を構え、また古くからの仏教寺院をキリスト教の大聖堂に変え、暴れ川である紅河に巨大な鉄橋を渡して、中国

雲南に届く鉄道列車を走らせた。新市街にはヨーロッパ文明の力を誇示するための壮麗な建造物がつくられ、異民族の支配力が象徴的に表現された。とはいえ、前近代のベトナム独立王朝が中国の科挙制度を導入して官僚制をその支配体制の骨格としたように、フランスは近代高等教育を施すインドシナ大学をハノイに設けて、植民地体制を支える現地人官僚を養成した。政治都市としてのハノイの伝統は、この意味でも継承されたといえる。

他方、民衆にとってのハノイは、元来、紅河デルタで産出される農村手工業品の一大集散地としての機能を持つ城下町であった。旧市街には連続する細長い町家の集合体が、今も存続する。仏領期には当時の新しい建築様式が折衷的に取り込まれ、独特の奥行きを持つユニークな生活空間を再生しつづけた。そのような旧市街を、フランス植民地権力は一掃することも、改造することもできなかった。フランス人の飛び地のような新市街区と、現地人のための旧市街区の両方が分立共存した街、それが新しい仏領インドシナ連邦の首都ハノイの基本構造となった。

一方のサイゴンは、歴史的に南進するベトナム人の開拓地への発進拠点であり、フロンティア世界の入り口としての本質を持っていたといえるだろう。ベトナム人は17-18世紀を通して先住民族クメール人を凌駕したが、フランス人は19世紀半ばにサイゴンに到着するやベトナム人社会を一掃し、熱帯アジアの一角に「東洋のパリ」を描き出そうと試みた。サイゴンは、建設の当初からフランス人がフランスのための国際近代都市をデザインし、贅を尽くした壮麗な建造物の数々を産み出すかにみえた。本国パリのオペラ座の建築と時代的にはほぼ同じ頃（1870年代～1890年代）に、サイゴンの都市建設は進められていた。

しかし、ベトナム北・中部の植民地化が始まると、仏領インドシナの中心はハノイに移った。世紀末転換期のドゥメール総督の諸改革によって地方の財政基盤が連邦政府に吸い取られるしくみや地方の自由裁量権が狭められたことは、もはやインドシナの一地方にすぎなくなったコーチシナのサイゴンに、植民地近代都市建設の挫折を余儀なくさせた。計画の縮小変更が相次いだのであった。

白人の街サイゴンの隣接地区には、現地人のための居住区が付設されていた。しかし、植民者による都市空間の分離の意図に反して、フランスの到来以前から存在した華僑の町チョロンの存在は重要だった。チョロンは、植民地経済を支えた仏領期最大の物流センターとして発展した。やがてサイゴンとチョロンは合併され、植民者が望んだ支配の発信基地としての「東洋の小パリ」は、まさにアジアに浮かぶフランスの小さな島と化したのである。

平成17年3月31日 発行 非売品

JCAS 連携研究成果報告 8

中川文雄・山田睦男共編

植民地都市の研究

編集・発行 人間文化研究機構

国立民族学博物館

地域研究企画交流センター

〒565-8511 吹田市千里万博公園10-1

TEL 06 (6878) 8343 (事務室)

印刷 中西印刷株式会社

〒602-8048 京都市上京区下立売通小川東入ル

TEL 075 (441) 3155
